

第44回人権啓発 詩・読書感想文 入選作品集



みんなでかんがえよう
みんなのじんけん



目次

第44回人権啓発詩・読書感想文
募集・表彰事業について……………2

詩の部門

小学校(小学部)低学年の部

おにいちゃん……………4
みんなと比べなくてもいい！……………6
戦争のない平和な世界……………8
ともだちっていいな……………10
きみといると……………12

小学校(小学部)高学年の部

みんなのすきなこと……………14
自分の道……………16
日本人じゃないから……………18
自分らしさ……………20
その一言で……………22
お兄ちゃんの色……………24
いとこのお兄ちゃん……………26
手をつないであるく……………28
私の役目……………30

中学校(中学部)の部

「レター」……………32
未来の調べ……………34

ちがう……………36
好き嫌い……………38
普通とは何か……………40

読書感想文の部門

小学校(小学部)低学年の部

目に見えないメガネってすばらしい……………42
小学校(小学部)高学年の部
差別のない世界にするために……………44
あきらめないで どんな時も……………46
十八歳から考える人権……………48
見えるハンディ・見えないハンディ……………50
相手を思いやること、理解すること……………52

中学校(中学部)の部

この世界の誰かの幸せ……………54
目が見えない人は世界をどう見ているのか……………56
友だちってなんだろう……………58
透明なルール……………60
ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー……………62
講評……………64

阪南市立桃の木台小学校	5年	かたやま 片山	りょうこ 稜子
-------------	----	------------	------------

中学校(中学部)の部

大阪市立墨江丘中学校	2年	いじま 飯島	ちさと 千暁
茨木市立養精中学校	3年	かわもと 川本	まこ 真子
寝屋川市立第九中学校	1年	ふなもと 船本	みおり 美央莉
泉南市立泉南中学校	3年	に お 丹尾	いとみ 愛美
泉南市立泉南中学校	3年	たごころ 田所	かえで 楓

読書感想文部門

小学校(小学部)低学年の部

大阪市立日吉小学校	3年	さかい 阪井	かの 佳乃
-----------	----	-----------	----------

小学校(小学部)高学年の部

堺市立錦小学校	5年	やまもと 山本	はずむ 弾
富田林市立錦郡小学校	5年	おおつか 大塚	なごみ 和
寝屋川市立宇谷小学校	6年	たき 瀧	そうし 颯心
交野市立交野みらい学園	5年	かとう 加藤	れん 蓮
阪南市立尾崎小学校	6年	やまもと 山本	さくら

中学校(中学部)の部

大阪市立墨江丘中学校	2年	しらかわ 白川	あかね 茜
堺市立津久野中学校	3年	きりこ 切後	いづみ 泉美
泉佐野市立第三中学校	1年	ひろうら 廣浦	しょうたろう 翔太郎
泉南市立泉南中学校	1年	さいとう 齋藤	みの は 穂葉
交野市立交野みらい学園	8年	やまうち 山内	らな

○表彰式

令和8年1月25日(日) ピースおおさか(大阪国際平和センター)

第44回人権啓発詩・読書感想文 募集・表彰事業について

一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さやお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内在住・在学の小・中学(部)生から募集しました。

○主催

大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会(愛ネット大阪)

○募集期間

令和7年7月1日(火)～8月29日(金)

○応募、審査

詩部門・読書感想文部門合わせて959作品の応募があり、審査会において30作品を入選としました。

詩部門

小学校(小学部)低学年の部

大阪府立大阪南視覚支援学校小学部	1年	くむら 工村	あきな 咲七
和泉市立黒鳥小学校	3年	ほった 堀田	くるり 來瑠莉
泉南市立樽井小学校	3年	つじもと 辻本	そうま 蒼真
阪南市立尾崎小学校	2年	ばば 馬場	いちはか 彩千華
阪南市立桃の木台小学校	2年	しらかわ 白川	あさと 朝登

小学校(小学部)高学年の部

堺市立福泉小学校	4年	かなたに 金谷	わくへい 和久平
堺市立錦小学校	5年	まつもと 松本	しの 紫乃
東大阪市立英田南小学校	6年	つきやま 築山	さな 紗奈
東大阪市立英田南小学校	6年	おおはし 大橋	りお 璃音
東大阪市立英田南小学校	6年	ひらい 平井	りんか 梨花
阪南市立西鳥取小学校	5年	みむら 三村	しおり
阪南市立西鳥取小学校	5年	やぶした 藪下	こうた 昂大
阪南市立西鳥取小学校	6年	たけだ 武田	りっか りっか花

おにいちゃん

大阪府立大阪南視覚支援学校小学部 一年 工村 咲七

けんかはだめだよ

いっしょに ゲームしよう

となりでいっしょに ねよう

いっしょに おもちゃであそぼう

いっしょに うたおう

はるがきたら おそとであそぼう

いっしょに さくらをみよう

いっしょに おはなぞだてよう

いっしょに おかしたべよう

いつも いっしょにあそぼう

いっしょに おふろはいろいろ

ふたりで だいじょうぶ

すてきなえがおで

いっしょに わらおう



みんなと比べなくてもいい!

和泉市立黒鳥小学校 三年 堀田 來瑠莉

自分は、自分

みんなは、みんな

みんな違ってみんないい

みんなと比べなくていい

自分は、自分らしく生きていけばいい

人に決められる権利はない

自分のことは、自分で決めていい

何でも人と比べていると

将来

人にきめられることしかできない人になるかもしれない

だから自分で決めることが一番だいじ!



戦争のない平和な世界

泉南市立樽井小学校 三年 辻本 蒼真

元気で楽しく明るく遊べたり

仲良く学校に来たりするのは

平和だから

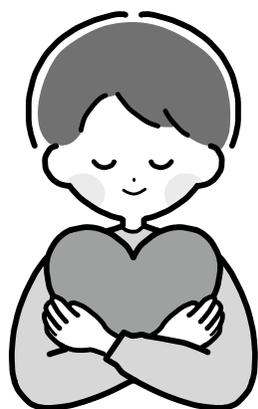
平和がずっと続くように

ぼくはみんなにやさしくしゃべりたい

自分やみんなが平和でいられるために

ひとりひとりがやさしくがんばる

そうすれば平和でいられるんじゃないかな



ともだちっていいな

阪南市立尾崎小学校 二年 馬場 彩千華

たのしいときは

いっしょにたのしんでくれる

つらいときは

いっしょにかなしんでくれる

うれしいときは

いっしょにわらってくれる

おこっているときは

いっしょにおこってくれる

ともだちってステキな人だと思うから

これからもたいせつにしたい



きみといるよ

阪南市立桃の木台小学校 二年 白川 朝登

きみといると心がはずむ

きみといるととても楽しい

きみといると何でもできそう

きみといると元気が出る

同じ気持ちだとうれしいな

わたしの友だちを大切にしたいな



みんなのすきなこと

堺市立福泉小学校 四年 金谷 和久平

ぼくは人形あそびが大好きだ

かわいいアザラシでよくあそぶ

おねえちゃんはヒップホップダンスが

大好きだ

いつもかっこよくおどっている

パパは戦隊ヒーローが大好きだ

おもちゃをいっぱい集めている

ママは韓国のアイドルが大好きだ

ハングルの勉強をしている

おばあちゃんは青色が大好きだし

おじいちゃんはアニメがすき

年れいも性別も生まれた所も関係ない

ぼくはみんながだいすきだ



自分の道

堺市立錦小学校 五年 松本 紫乃

ねえねえねえねえ知っている？

あなたの目の前の人

ちゃんと名前があるんだよ

言いたいこともあるんだよ

やりたいこともあるんだよ

大事な家族もいるんだよ

ことばやはだの色が違っても

得意なことが違っても

なりたい職業が違っても

変わり者だって言わないで！

仲間はずれにしないで！

みんなおなじ大切な人

ひとりひとり自分の道を歩んでる

みとめあおう

優しい言葉を忘れずに



日本人じゃないから

東大阪市立英田南小学校 六年 築山 紗奈

日本人じゃないから

マンションやアパートに入居することができない

日本人じゃないから

温泉に入ることができない

日本人じゃないから

インターネットで差別のような書き込みをされる

日本人じゃないから

ただそれだけで

差別されている人がいる

みんな同じ人間なのに

ひとりひとりの個性や違いを

大切にすれば外国人への差別は無くなるはず

みんな違って当たり前だから

外国人への差別をなくして

誰でも安心して暮らせるようにしたい



自分らしさ

東大阪市立英田南小学校 六年 大橋 璃音

自分らしさは

みんなが持っているもの

大切なもの

でも本当の自分を出してしまうと

みんなに笑われてしまう

からかわれてしまう

こんな恐怖から逃げていたら

みんなの思う「ジブン」になれても

自分の思う「ジブン」にはなれない

別の意味での「鬼ごっこ」

でも

心が暗くなる

「鬼ごっこ」はしなくていい

自分らしさは

隠す必要はないのだから



その一言で

東大阪市立英田南小学校 六年 平井 梨花

あなたが言ったその一言で
相手の心は傷ついている

あなたが言ったその一言で
相手が嫌な気持ちになっている

悪気はなかったとしても
「ごめんね」で許されない

相手は心の傷を負っているから

あなたが言ったその一言
あなたは言ったことを忘れていても
言われた人は覚えている

悪気はなく言ったその一言
相手が傷ついてしまうかもしれない

何も考えないでその一言を言う前に
その一言で相手が傷ついてしまわないか
しっかり考えてから発言しよう

もしかしたらあなたが発したその一言で
相手が傷ついてしまったかもしれない

もう一度考えてみて
その一言で相手が傷ついてしまわないか

その一言を考えてから発してみれば
相手が傷つかないで済むかもしれない

何も考えずに発言しないで
その一言を変えれば相手が嬉しい気持ちになるかもしれない



お兄ちゃんの色

阪南市立西鳥取小学校 五年 三村 しおり

私には お兄ちゃんがいる
やさしくて 図工が上手で
いっしょに遊ぶと いつも楽しい

でも お兄ちゃんには
見えにくい 色があるんだって
うすむらさきと 水色
茶色と 緑も 似てるらしい

ようち園のぬりえで おたさん
はい色にぬっていたんだって
「なんでその色？」ってきいたら
「そう見えたから」って笑ってた

学校では 友達に
「この色であってる？」って 聞きながら
自分のやり方で がんばってる

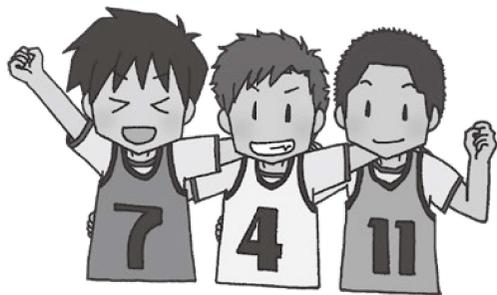
信号の色も
右・真ん中・左 で覚えてる
それでも とまどうことが あるみたい

中学生のとき
ピブスの色が分からなくて
同じチームの子に せめられて
しょんぼり帰ってきたこともある
私は かわいそうと思ったけど
なんにも できなかった

でも 今は思う
もし みんなが
色の見え方が違うことを 知っていたら
お兄ちゃんが きずつくことも
なかったかも しれないって

お兄ちゃん
目に見える色だけじゃなく
心で感じたものを 絵にしている
それは やさしいピンクや
ふかいむらさき あたたかい赤で
見ていると 私の心もあたたかくなる

私も 人の気持ちを大事にしたい
心の中の色を 見のがさないように
色は 目で見るものだけじゃない



いとお兄ちゃん

阪南市立西鳥取小学校 五年 藪下 昂大

ぼくのいとお兄ちゃんは

言葉で気持ちを表現できない

でも感じていないわけじゃない

表情を見たり行動を見たりして

他の人が分かればいい

うれしいときは、ぼくらと同じにっこりとした顔

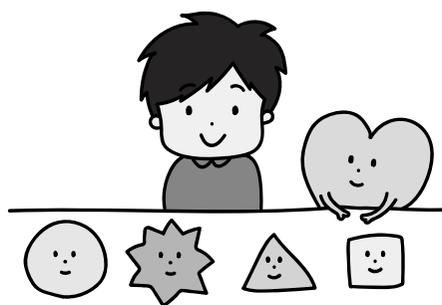
かなしいときは、ぼくらと同じさみしそうな顔

たのしいときは、とびはねたり、声を出して笑っている

おこっているときは、大きな声を出している

ぼくは、そんないとお兄ちゃんが

大好きだ



手をつないであるく

阪南市立西鳥取小学校 六年 武田 六花

ひとりでないでいる君
声をかけた
いでも勇気がいる

でも一歩近づくと
君の目が少し笑った

笑った君の手をにぎる
手をにぎると
君はもっと笑った

君の手のぬくもりは
わたしにもつたわった

そのぬくもりをもって
一緒にあるいていく

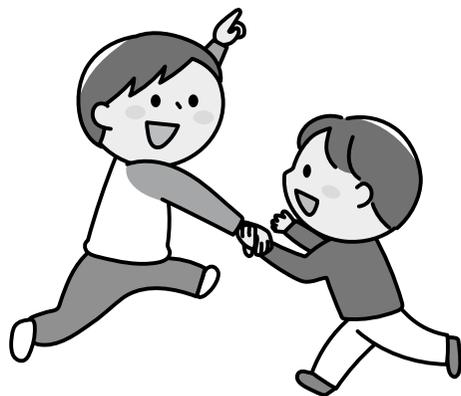
手をつないだら
ひとりじゃない

笑ってあるけば

ひとりじゃない

このままずっと
あるいていく

手をつないだまま
あるいていく



私の役目

阪南市立桃の木台小学校 五年 片山 稜子

私の生まれたこの町の、

空は青く美しい。

海は豊かだかがやいている。

だけどたった80年前、

空は戦とう機でうめつくされた。

朝も昼も夜も関係なく

町中に空しゅう警報が鳴りひびいたそうだ。

展示されたこの町の戦争の記おくは、

汗かく私に身ぶるいさせた。

こわい。おそろしい。

だけど、私には想像がつかない。

それでも強く想うのは、今を「戦前」にしてはいけないということ。

そのために何ができるのか。

わからない、くやしい、10才の私。

だけど、知ろうとすることをやめない。

それが、戦後70年に生まれた私の役目。

戦後を生きて、考え続けたい。



「ヒト」

大阪市立墨江丘中学校 二年 飯島 千暁

みんな人

同じ人

生まれたところ

住むところ

見た目

性格

話す言葉

たったそれだけがちがうだけ

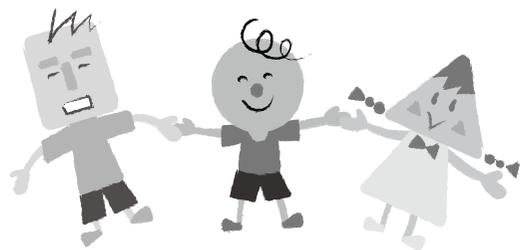
ひとくくりにまとめたら「ヒト」

なのに

人は他人を

ものさしではかかってしまう

何も知らないのに



未来の調べ

茨木市立養精中学校 三年 川本 眞子

ひとりのこえが 風になる

とどかぬ思いも 歌になる

手と手をつなげば 伝わること

心と心で つくる音

ちがうって 悪くなくない

同じじゃないって 強みじゃない

心のコアに 見えないドア

みんなの普通が 線を引き

みんなの普通で 息をひそめる

変だねなんて 言わないで

そうなんだねと うなずいて

広がる空 心もほら

世界は一つ 思いは一途

奏でよう ともに歩もう

手と手をつないで つくる音

心と心を つなぐ音



ちがう

寝屋川市立第九中学校 一年 船本 美央莉

誰かと同じ

誰かとちがう

誰ともちがう

みんなと同じじゃなくてもいい

みんなとちがうからこそ面白い

空も海も山も谷も

一つも同じ景色なんてない

だからこそ

色々な人がいるこの世界は

本当に面白くて

素敵な世界



好き嫌い

泉南市立泉南中学校 三年 丹尾 愛美

私はピーマンが嫌い。

だって苦いから。

匂いも独特だし、色も緑で美味しくなさそう。

でもお母さんが作ってくれたピーマンの肉詰めは、すごく美味しいって思えたんだ。

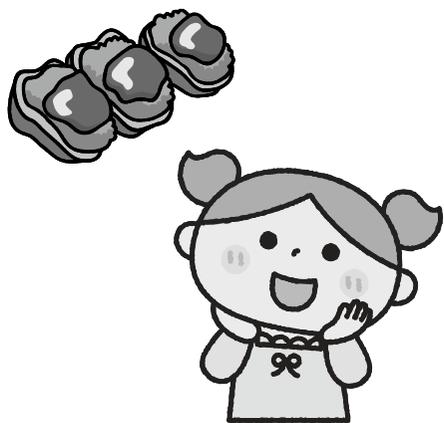
私は三人グループが嫌い。

だっていつか仲間外れにされて、一人ぼっちになっちゃうかもしれないから。

でもみんなでもない会話をしているだけで、すごく楽しいって思えたんだ。

ピーマンも、三人グループも、料理方法や関わり方を少し変えるだけで、自分にとって『良いモノ』に出来るんだ。

一見自分には合わないかもと感じても、見方を変えて良いところを見つけ出すことが大切なんだ。



普通とは何か

泉南市立泉南中学校 三年 田所 楓

「普通」とはなんだろう

みんな同じではつまらない

笑い方が違う

考え方が違う

好きなことも苦手なことも

一人ひとり違う

誰かが決めた「普通」なんて

この世界にひとつもふさわしくない

あなたらしく

私らしく

生きていい

ありのままの自分を大事にしよう

だって「普通」なんて言葉は

一人ひとりの良さを隠してしまう

魔法だから



目に見えないメガネってすばらしい

大阪市立日吉小学校 三年 阪井 佳乃

私は、本屋で読む本を探している時、表紙が目立っている本を取りました。中を見ると絵が多くてかんに読めそうだったのでこの本を読むことにしました。表紙を見てそうぞうしていたのは、ふしぎなものが見えるカラフルなメガネの話かなと思っていたけど、読んでみるとちがう話でした。

主人公で色かくいじょうのあるトーマスが家族と食事をしていて、他の人たちには、どんなふうに見えているかを考えてるところから始まる、心の中にある「目に見えないメガネ」についてのお話でした。

私は、色かくいじょうという言葉をはじめて知りまし

た。意味は色の見え方が人とちがって見えてしまうことです。そしてもう一つの意味が肌の色のちがいが見えない、人しゅが気にならないという意味だとかこの本には書いてありました。どういう意味なのかお母さんに聞いてみると、「肌の色とか、見た目とかでこんな人と勝手に決めつけてはダメなことだよ。みんなちがっていいんだよ。」と教えてくれました。

私は、自分のメガネをそうぞうしてみました。私は、サッカーが大好きです。私が、トーマスの家族とテーブルにすわったら、まわりの人はみんなプレイヤーに見えてしまいそうです。もう一つのはだの色のちがいが見えない事も考えました。私が休みの日にサッカーをするのは、お父

さんだけです。それは、

「女の子なのにへん。」

と言われたからです。それは、言った人のメガネを気にした自分が、自分メガネで自分を見ていて「男の子の遊びだから自分がやるのはへんと思われる」と決めつけていると、この本のおかげでわかりました。本の中の家族のように見たいものを見て、すきな事をすればいいと思いました。

同じものでも人によって見えているものはちがう。メガネをかけて見ることは、自分にも自分以外の人にもあることがわかりました。私は、今まで男の子と女の子のするスポーツや、すきな色、すきなアイドルなど決めつけていたことが、ほかにもたくさんありました。これからは、もし自分とちがう考えの人がいても「ちがうんだね」と思えばいいだけなので、この本は「みんなちがう」ということを教えてくれたすばらしい本でした。

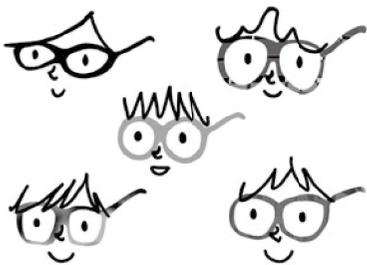
(※)色覚特性や色覚多様性といった表現もあります。

「ねえねえ、なに見てる?」

絵と文 ピクター・ベルモント

訳 金原 瑞人

河出書房新社



差別のない世界にするために

堺市立錦小学校 五年 山本 弾

「ゴーストボーイズ」は、黒人少年ジェロームが、ただおもちゃのじゅうを持っていただけで白人けい官にうたれ
てしまい、ゆうれいとなって物語を語るお話です。読み進
めるうちに、この出来事がただのひげきではなく、長い歴
史の中で何度もくり返されてきた差別の一つだというこ
とに気づかされました。ジェロームはゆうれいになってか
ら、自分と同じように差別で命をうばわれた「ゴースト
ボーイズ」と出会います。その中には九五五年に実際に
ころされたエメットティルという少年もいました。エメッ
トは、自分がころされたのは「見た目だけできけん」と決
めつけられたから」だと語ります。読んでいてとてもかな

もしぼくがジェロームだったら、きつとくやしくて、悲
しくて、何も信じられなくなると思います。でもジェロー
ムやエメットたちは、いかりだけでなく、「かこを知ってほ
しい」というねがいをもちつづけていました。ぼくはその
強さにかんどうしました。この物語を通してぼくは「知
ること」「伝えること」の大切さを学びました。知らないけ
れば、外国でこんな差別がおきていたと、見た目だけで
何も悪いことをしていない人がころされてしまっているこ
とは知りませんでした。そしてそれを伝えていかなけれ
ばずっと残ります。どんなことでも自分のまわりでまち
がったことをしていたら「それはおかしい」と言える人に
なりたいです。「ゴーストボーイズ」は、悲しい物語であ
りきぼうも教えてくれる本でした。ジェロームたちが伝
えようとした「もう同じことをくり返さないで」という
声をばくもわすれずに生きていきたいと思えます。

しくなり、「どうしてこんなことが何十年も変わらずに
おきるのだろう」と思いました。特に心に残ったのは、ジェ
ロームがけい官のむすめのセアラと話す場面です。セアラ
は、自分の父親が人をころしたことに苦しみながらも、
ジェロームの声を聞こうとします。立場がちがう二人が
少しずつ理解し合おうとするすがたを見て、「相手を知
ろうとすること」が差別をなくすとても大事なことだと
思いました。この本を読んでぼくは「差別」は外国人の
話だけではないとかんじました。学校でも見た目や話し
方で人々からかう場面を見たことがあります。本人は
じょうだんのつもりでも、相手をききつづけているかもしれ
ません。ぼくも相手のことをよく知らないまま「こうい
う人だ」と決めつけてしまったことがあったのでそれは差
別かもしれないと気づきました。

「ゴーストボーイズ 僕が十二歳で死んだわけ」
著 ジュエル・パーカー・ローズ
訳 武富 博子
評論社



あきらめないで どんな時も

富田林市立錦郡小学校 五年 大塚 和

あなたは、大なわをとんだことがありますか。この本を読もうと思ったのは、「おおなわ跳びません」というタイトルが気になったからです。

この本は、左足にハンディをもつ主人公の双葉が

「おおなわ大会は出ません」

と言ったことをきっかけに、クラスメイトたちが双葉が参加しやすい方法を考えていくお話です。

この本を読んで、私が特にステキだなと感じたことが二つあります。二つ目は、学級会の話し合いで、いつもクラスメイトのまい花が自分の意見をたくさん言っていることが、スゴイなと思いました。私のクラスの学級会でも、IとKがまい花みたいに自分の思っていることをどんどん

言います。みんなが考えこんで教室がシーンとなつてしまつた時に2人が意見を言うと、その言葉がヒントになつて考えやすくなります。みんな助かっています。私は学級会であまり意見を言わないので、勇気を出してたくさん言うなんてステキだなと思っています。

二つ目は、双葉のクラスメイトは友達のことを思いやり行動していることがすごくステキだなと思いました。双葉の親友さくらは、学級会の話し合いでふだんはあまり話さないのに双葉のために勇気を出して言いました。

「双葉は『自分が出るとめいわくになるから跳びたくない』と言ったけど、わたしもクラスみんなも双葉にめいわくになると思つてほしくない。」

さくらは、本当に双葉のことを思いやっていて、友達思いだなと感じました。わたしのクラスでも、アルティメット大会に向けて練習している時にフリスビーを投げるのが

苦手な友達にやさしくアドバイスしてあげるNちゃんがいました。それを見て、私も一しよにアドバイスしながら練習しました。そのおかげでアルティメット大会本番で、みんなのパスがつながってゆう勝することができました。相手のことを思いやるって大切だなと感じました。

この本を読んで、クラスはいろいろな友達が助け合つていいクラスになるんだなと思いました。私は、まい花みたいに学級会で意見を言おうと思います。また、双葉みたいに勇気を出して何かをするということは大切なので、私もすぐにあきらめないで、いろいろなことにチャレンジしようと思います。そして、自分のクラスも友達のことを思いやるクラスになるぞ、オー。



「おおなわ跳びません」

作 赤羽 じゅんこ

絵 マコカワイ

静山社

十八歳から考える人権

寝屋川市立宇谷小学校 六年 瀧 颯心

「人権」という言葉は、学校などでよく聞くことがあるものの、どこか遠い事のように感じていた。しかし、『十八歳から考える人権』を読んで、これは決して他人事ではなく、自分自身にも深く関係する問題であることに気づかされた。特に、十八歳という年れいが「大人」としての責任を持ち始める区切りである以上、人権について自分の意見を持ち、動く姿勢が求められていると感じた。

本書では、差別や貧困、ジェンダー、マイノリティの権利などのいろいろなテーマが取り上げられている。中でも心に残ったのは、見えにくい差別が私たちの周りに今も存在しているという事実だ。例えば、性的マイノリティのきつかけになった。これからは、目の前の小さな不平等や
いわ感にも目をそらすせず、自分にもできることをやっていきたい。

「18歳から考える人権」
編 六戸 常寿
法律文化社

人々が日常生活で感じる息苦しさを、生まれた環境によって進学や就職の機会が左右される現実など、これまで深く考えたことなかった視点にふれ、しよう撃を受けた。

また、人権は、「守られるべきもの」という受け身の意識だけでなく、「守る側になる責任」もあるという考え方に共感した。自分が差別やへん見に加たんしていないか、何気ない言動がだれかをきずつけていないかを振り返ることの大切さを感じた。SNSなどを通じて簡単に言葉を発信できる今だからこそ、より一層、相手の立場を思いやる姿勢が必要なのだと思う。

この本を読んで、人権とは部の人の問題ではなく、一人ひとりの生き方に関わるふへん的なテーマであると実感した。十八歳になった今、自分が社会の一員としてどのような価値観を持ち、どんな行動を取るべきかを考える



見えるハンディ・見えないハンディ

交野市立交野みらい学園 五年 加藤 蓮

ぼくは「おおなわ跳びません」という本を読みました。この本を選んだのは、タイトルがとても気になったからです。この本は、五年二組の佐々木双葉が「おおなわ大会に出ない」と宣言したことから物語がはじまります。双葉は左足のハンディのせいで、クラスが負けてしまうことを不安に思い、おおなわ大会に出ないと言ったのです。クラスメイトたちは双葉を支えたいと思っているけれど、方法が分からなくて、みんななやんで考えを出し合い、何度も話し合って、五年二組の答えを見つけて行くという話です。

ぼくがこの本を読んで一番心に残ったところは、「見えるハンディ・見えないハンディ」という章です。外から見て

はつきり分かる双葉のような身体的ハンディと、外からは見えない心のハンディもあるという話です。

おおなわなどの団体である競技に苦手意識を持っていたり、体格的にスポーツが得意ではない子も、「おおなわ大会に出ない」と言いはじめます。ぼくも、この子たちの気持ちがよく分かります。ぼくも体育大会のリレーなどは自分がぬかされちゃったり、失敗したらどうしようと思ってしまうって、不安で休みたいと思うからです。これは見えないハンディになるのです。

そんな時、ぼくはみんなに共感してはげましてほしいと思っていました。そういう気持ちをわかってもらうには、おたがい時間をかけて知っていくことが大事なのだと思います。おたがいを知ることによって色々な解決法や考えや思いを共感していくことができるからです。

話の中で「ドンマイ、ドンマイ」「ここから」「次いこう。

きりかえ!!」などの声かけが、失敗した時、押しつぶされそうな気持ちをすくってくれとあり、五年二組のみんなはおおなわ大会で声かけを心がけるようにします。そうすることで勝ち負けだけにしぼられず、楽しめるのではないかなど色々な案を話し合ったことで、双葉や参加したくなかったクラスメイトも楽しむことができました。「ドンマイ」などの声かけは、体育などスポーツの時だけでなく思いがちだけど、他の授業の時や日常生活の中でだれかが失敗した時、まちがった時、落ちこんでいる時、「ドンマイ、ドンマイ」「大丈夫だよ。」「いっしょに考えよう」と声をかけ、他の人達を思いやり、そんなことができる自分になっていきたいです。

「おおなわ跳びません」

作 赤羽 じゅんこ

絵 マコカワイ

静山社



相手を思いやること、理解すること

阪南市立尾崎小学校 六年 山本 さくら

私はこの夏「ぼくの色、見つけた!」という本に出会いました。私は、作者がどういう意味でこの題名をつけたんだろうと不思議に思いました。読む前は、主人公が自分で新しい色を見つけた話なのかなと思いましたが、私に相手を思いやり、理解する気持ちの大切さを教えてくれた本でした。

主人公は、井上信太郎という小学五年生の男の子です。彼は見た目では他のクラスメイトと違いはありません。しかし彼は色覚障がいというハンディキャップを背負っています。色覚障がいとは、実際に見える色が他の人とは違う色に見える、または、特定の色の区別がつきにくい状態のことです。私は、色覚障がいという言葉は聞いたことはありませんが、実際どのような状態なのか

は知りませんでした。私は色覚障がいについて知った時、一言で言うと大変だなと思いました。その理由は、もし私が彼の立場なら、普段の生活の中で色を間違えるとクラスメイトからかわられたりして、いじめられるのかと思ったからです。

しかし、彼は私の不安を取り払ってくれました。彼は担任の先生に、自分の不安を解決する方法を相談しました。彼の不安とは、色を間違えたらクラスメイトからかわれ、嫌な気持ちになることです。実際に彼が自分の似顔絵を描いたときに、口の色を茶色に塗り友達にからかわれたことがあったからです。彼は自分のハンディキャップと向き合い、乗り越えるために挑戦しました。すると先生は真剣に彼の話聞き、先生の父親も彼と同じハンディキャップを持っていたことを教えてくれました。そして先生は彼のために色の使い方を工夫してくれました。例えば、教科書の地図を区別がつきやすい色に塗ったり、なぞったりしてくれました。また、先生はクラスメ

イトに先生の父親のハンディキャップを話してくれ、もし周りに色の区別がつきにくい人がいれば、相手の気持ちを理解してほしいと教えてくれました。それから彼はクラスメイトからかわられることがなくなり、話ができる友達が増え、学校生活が楽しくなりました。彼は彼の色を見つけたのです。

この本を読んで、世の中には私が知らなかったハンディキャップを持っている人がいることが分かりました。私の妹も、左耳だけ低い音が聞き取りにくい状態です。見た目では分かりませんが、テレビの音量が大きめだったり、私や両親に何回も聞き直したりしています。妹は口にはしません、今考えると苦労しているのだと思います。この本で彼に会わなければ、妹の気持ちをきちんと理解出来ませんでした。

これから、私は色々な人に出会おうと思います。私のもので相手に判断するのではなく、相手を思いやり、相手の気持ちを理解できるような人になりたいです。



「ぼくの色、見つけた!」
作 志津 栄子
絵 末山 りん
講談社

この世界の誰かの幸せ

大阪市立墨江丘中学校 二年 白川 茜

自分がされて嫌なことは、人にしない。一度は聞いたことがあるであろうこの言葉を守り続けている人は、いったいどれくらいいるのでしょうか。

図書館で暇つぶし用に本を探していたときに、好きな作家さんの名前が目に入り、これでいいか、と軽い気持ちで借りたのが「見上げた空は青かった」との出会いです。この本を初めて読んだとき、私は小学六年生でした。この物語のあらすじは、第二次世界大戦中、家族と離れ、妹と二人で隠れながら暮らすユダヤ人の少女ノエミと、同じく家族と離れ、学童疎開をしている少年風太が、ウサギのぬいぐるみの「ミミちゃん」と共に戦争のある世界で生きていく、というお話です。

この小説を読むまでの私は、戦争についてある程度の知識はありましたが、自分には関係のないことだと思っ、そんなことがあったんだなあ、と漠然とした感想しか持っ

れなくなる。私は、誰かにひどい事をされるのも、誰かにひどい事をするのも、絶対に嫌です。だから、戦争が世界から消えてほしいと、私は思います。

私は戦争に巻き込まれたくありません。では、どうすれば戦争がなくなるのか考えて、ある言葉を思い出ししました。

「自分がされて嫌なことは、人にしない」

小さな子供でも守ることができるこの言葉を、世界中の全員が守れば、戦争のない未来につながるのではないかと私は思います。戦争をしたい人なんて、そうそういません。誰だって戦争で死ぬなんて、嫌なはずです。少なくとも私は絶対に嫌です。だったら、私たちがこの言葉を守るだけで、戦争だらけのこの世界を変えられると思います。偉い人じゃなくても、大人じゃなくても。

今年で日本は終戦から八十年を迎えます。そんな今、二年ぶりにこの小説を読み返しました。ノエミと風太より少しだけ大人に近づき、戦争に関する授業を受けたり、戦争に関する本を読んで、戦争について知ろうとしています。今も、世界では戦争や紛争、そして冷戦がいくつもの場所で起きています。戦争はなくならないのかも知れない。そんな風に思ってしまうこともあります。けれど、

ていませんでした。この小説は、私に戦争というものが、自分と深く関係のあるものと教えてくれた、私の一番の本です。

この小説の中で最も印象に残ったのは「病院」の話です。ノエミのいたアウシュヴィツ強制収容所では、毎日のように誰かが部屋から連れ去られ、「病院」に連れていかれます。「病院」に行った人はひどいことをされて、帰ってきたときには、同じ人とは思えないような状態になり、殺されてしまうのです。私はこの話を読んでいるとき、怖くてたまりませんでした。もし、私が戦争に巻き込まれたら、こんなひどい事をされてしまうのだろうかと考えたからです。あまりにも怖かったので、私は二日読むのを止めました。

気分を落ちつかせるためにぼんやりしていると、ふと、別の考えが頭をよぎりました。もしかしたら、私が誰かにひどい事を「する側」になることもあるのではないかと。誰かを殺してしまうこともあるのではないかと。そのとき私は初めて、本当に戦争の怖さを知ったと思います。戦争に関わってしまうえば、誰一人として幸せでいら

誰かの幸せが奪われないように、私は考え続けなければいけないと思います。戦争について、この世界の誰かの幸せについて。

「見上げた空は青かった」

著 小手鞠 るい
講談社



目の見えない人は世界をどう見ているのか

堺市立津久野中学校 三年 切後 泉美

私は、体を動かすほうが好きなので本はあまり読まなくて国語は苦手なほうです。ですが、この本は目が見えない人が世界をどう感じているのかを実際の体験や、やりとりを通して書いていたり少し絵も加わっていて想像してたよりずっとわかりやすい本でした。

私の母は「網膜色素変性症」という目の病気をもっており、昔より見える範囲が少しずつ狭くなっています。今も生活はできていますが、家事がより大変になったり夜道では歩くのが大変だったり、人混みでは誰かにおぶつかってしまうことがあります。なので「目が見えない人は世界をどう見ているのか」というテーマは私にとってすごく身近なものでした。そして私は、母が世界をどのように見ているのか知りたいと思い、この本を選びました。

私が印象に残ったのは、目の見えない人たちがどうやって道を歩いたり、エスカレーターに乗ったりしているのかの説明で、音の反響や風の流れ、足のうらの感覚をたよりにしていると知って、私はすこし驚きました。自分が普段ほとんど意識していない感覚を、すごく大事にして生

きているんだなと思いました。私の母は、暗い場所で足元の感覚や周りの気配や記憶をたよりに歩いています。私は今まで「大変そうだな」と思っていた時もありましたが、「それってすごいことなんだな」と思いました。母は母なりに私のことを考えてくれてお弁当は「から作ってくれたり、ボタンがとれた時は見えにくいのに編んでくれたりおいしいご飯を作ってくれたりしてくれます。私は母は偉大だな」とこの本をきっかけに改めて思いました。それから、「障がいがあるからかわいそう」という考え方は間違っているというメッセージも心に残りました。私は正直、少しそう思ってしまったところがあります。ですが、この本を通して、目の見えない人たちが自分のやり方でちゃんと世界を感じて、生活して、楽しんでいることを知って、考え方が少し変わった気がしました。

この本のタイトルにある「見えない人は世界をどう見ているのか」という問いに、最初は「見えないのに見えるんかな」と思っていました。でも読み終わった今は、「見える、見えない」って、ただ視力のことだけじゃないんだなっと感じました。心で感じること、音やおいで世界を想像すること、人の気配を察すること、そういう感覚全部で人は世界を見ているかもしれないと思いました。そして、自分は普段とれだけ「見えること」に頼って生活して

これからもこの本で学んだことを忘れずに、母を支えながら生きていこうと思えることができました。

「目の見えない人は世界をどう見ているのか」
著 伊藤 亜紗
光文社新書

いるかも考えさせられました。私は百メートル走はゴールを見て走ったりしているけど、見えることがどれだけありがたいことなのか、普段はあまり気づかないです。ですが、この本はそういう当たり前が実は当たり前じゃないことを教えてくれました。私は読み終わったとき、もう少し母によりそってみようと思いました。私は色々やらかすので母にたくさん迷惑をかけるかもしれないです。私ができることは少ないだろうけど、小さなことでもいいので、母を支えることができればいいなと思いました。この本は、読む前よりも自分の世界を少し広げてくれたと思っただけでなく、家族との関わり方まで変えてくれました。難しいところも少しあったけど、自分の生活や家族のことと重ねて読めたので、すごく心に残ったし、この本を読めてよかったと思いました。これから「見える世界」だけじゃなく、他にもいろんな人の感じている世界も耳を傾けてみたり、短所だけを見るだけではなく長所や努力に気づける人になりたいと思いました。受験も大切だけど、生きていく力として、そういうところも今から、自分の中で育てていけたらいいなと思っただけ、そうすることでできるとだれかの背中をおせることもできるし、自分をはげますこともできるし、強みになると思っただけ、私の世界ももっと広がっていくと思っただけ、



友だちってなんだろう

泉佐野市立第三中学校 二年 廣浦 翔太郎

齋藤孝の「友だちってなんだろう」を読みました。

この本は、友だちとは何かを考えさせたり、本当の友だちを作るための方法が書いてありました。一番印象に残ったのは、「友だちだから言うけど」は鋭い刃という言葉と、「本音を言わせてもらおう」とも破壊力のある危険な言葉だということです。言葉を凶器にはいけない。親しい友だちだったら、感情をストレートにおつけていい訳ではないということを改めて考えさせられました。

自分自身の行動を振り返ってみると、友だちや家族に対して強い言い方をしてしまい、傷つけてしまったり、怒らせてしまうことがあったと思います。

例えば、一学期に友だちとのトラブルが多かったことです。その原因は、友だちと強い言葉を言い合ったことではないかと、この本を読んだことよって気付かされました。「親しき仲にも礼儀あり」と言う言葉があるように、どんなに仲の良い友だちや家族であっても、言うてはいけない言葉がある、礼儀や節度が必要だと思いました。

他にも、人をいじめてしまう危険性を、みんな潜在的

の意見を言えないからです。

この本を読んだことよって、いじめをしてしまう危険性が自分の中にもあるのではないかと思い、普段の生活でも気をつけていきたいと思いました。例えば、優越感を持ちたい気持ちや自分にもあります。他人よりテストで良い点を取りたい、他人より頭が良いと思われたくないという気持ち。そういう気持ちが強くなりすぎるのでなく、優しい気持ちを常に持てるようにしたいと思います。

そして、傍観者にもなつてはいけなさと感じました。もしも、自分の身近でいじめがあったとしても傍観者にならずにいられるのだろうか。本来ならば、いじめを止めることが出来れば良いのだけれども、先生に言うことや、いじめの被害者に声をかけることが精一杯かもしれない。加えて、いじめはダメだという意識を日頃から持つことが大切だと思います。

この本を読んで、友達について深く考える機会となりました。学校は人慣れするための場所であることも知りました。学校には様々な考え方を持つ人がいます。自分と似た考え方を持つ人もいれば、全くちがう考え方の人もいます。気が合う友達もいれば、仲良くできないかもと思ってしまう人もいます。気が合わないと思う人とも反発し合うのではなく、程良い距離感を持ち、ぶつかり

にもつているという言葉が印象に残りました。人間の特性、集団のなかで優位な立場に立ちたいという攻撃特性と考えられていると知って、自分の気持ちを考えさせられました。

いじていると、快感がわき、優越感もてるせいで、やめられなくなるのです。優位な立場に立つ。つまり、生存競争に勝つということ。生存本能のなかに、こういうメカニズムがあると知って、人間の生存本能がいじめにつながるというのがこの本で気付かされました。

そして、いじめは攻撃的な資質をもった部の人たちがやるのではなく、だれもがしてしまう危険を潜在的にもっているのだと知りました。いじめの快感の誘惑に勝てない人は、何かしら理由をつけて、いじめを正当化しようとしています。

例えば、あの人はこういうところが悪いから、自分がそれに気づかせて、罰を与えてやるという考え方です。しかしそれは人としての倫理感よりも、自分の快感を優先してしまう未熟さなのだとということにも筆者に気付かされました。

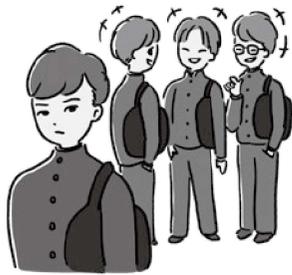
そして、いじめは「傍観者」も悪いというのを学びました。傍観者は人間として弱いのではないかと思いました。いじめにさそわれて、断ることもできず、止めようと自分

あわず、傷つけあわず、なごやかに交流し、必要なときは協力しあうことができるよう練習していきたいと思えます。

これから成長していくとともに、関わっていく人は増えていきます。社会に出ると今まで以上に様々な人と接することが必要になってくるでしょう。だから僕は、学校で人に慣れるように頑張りたいと思います。

「友だちってなんだろう。」

著 齋藤 孝
誠文堂新光舎



透明なルール

泉南市立泉南中学校 一年 齋藤 穂葉

この本の中心人物は佐々木優希という女の子です。優希は、周りに合わせるようなタイプです。クラス替えで一軍女子グループに入るようになって、本当の自分を隠して過ごすようになります。

優希は、新学期どんなソックスを履いていくか友達にメッセージを送ったけど、こんなことを聞いた自分が後から恥ずかしくなったという所は、私も同じような経験があります。私は、みんなと違うということが、恥ずかしいと思ってしまうので、よく友達に確認をしまいます。同時に何人にも聞いてしまうので、そこで意見が分かれてしまつて、結局自分で決めなくてはいけなくなります。これを何度も繰り返して、何度も反省します。

私が気になったのは、一軍女子といっしょにいれば、いじめやいじめられる対象になることはない、身の置き場に困ることもないという所です。私の友達は、明るくてお喋りだけと周りに合わす子、静かだけど自分の意見をしっかりと持っている子、色んなタイプの子がいます。どの子といつても、いじめやいじられる対象になる気がしませ

色んな心があると分かりました。だけど、そう思つてもそれを言うことはできないと思います。自分がそう思つていても、思っていることを言うのは勇気がいります。

愛みたいに見ただけでは分からないけど、教室で一緒に勉強をするのが辛い人もいるのかも知れない。無理に周りに合わせなくても良いと思います。自分がやりたい場所を勉強をしたら良いと思います。

この本を読んで、自分では気づいていなかった透明なルールがあると分かりました。友達と一緒じゃないと駄目という考えだったり感じたことを言えなかつたりするところです。

「同調圧力」に負けず思つたこと、感じたことを言うことが大切なんだと伝えたいことが分かりました。

同調圧力に負けず、みんなの前で自分の意見を言う人は羨ましいなと思います。私はそれができているのが瞳子なんじゃないかなと思います。瞳子は自分の思っていることをしっかりと相手に伝えることができる。素直な気持ちを隠さずにおつてくれる友達がいてくれたら頼りになるし心強いと思います。だから瞳子は目立つしリーダー的な存在になつてくるとは思いません。

私が人と違う意見をみんなの前で言えるようになる時は、自分に自信が持てた時なのかも知れません。だけ

ん。一軍女子の中の瞳子は努力などしていなくても、今までずっとヒエラルキーのトップにいたのだからと、優希は想像しているけど、そんなことはないと思います。瞳子は、みんなの前で自分の考えをしっかりと言えている。リーダーシップもあるんだと思います。明るくて、クラス替えをしてすぐ、優希にも話しかけてくれていました。優希が瞳子に対して勝手に一軍女子のトップだと思込んでるのが優希の透明なルールじゃないかと思いました。

私はこの本に出てくる秋野くんの自分の好きなことを周りの目を気にせず好きといえるところが羨ましいと思っていました。そして、優希が妬んでいた才能に恵まれているギフテッドの愛に対して、萩野くんは「学校が楽しそうには見えない」と心配している所も、私にはない優しさだと思えました。そして、この萩野くんと優希が仲良くなつて、優希の愛への思いが少しずつ変わっていくのが分かりました。

私が一番好きだったのは、愛が言い放つた「心をついて何それ。三十五人いれば三十五通りの心があるんだから」という言葉です。今まで私も「心をついて」と言われたら、「よし、みんなで心をついて頑張ろう」と思い込んでいたけど、みんな違う人間だから、色んな考えがあつて、

ど今は、友達に合わせる方が楽だと思つてしまつし、それが一番友達と仲良くしていける方法なんだと思います。だけど、それも私が勝手に考えた透明なルールなのかも知れません。だから、まずは近くの友達に本当の気持ちを言えたらいいなと思います。

「透明なルール」
著 佐藤 いっ子
KADOKAWA



ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー

交野市立交野みらい学園 八年 山内 らな

私は、「ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー」という本を見つけたとき、その本の名前の意味がまったく分かりませんでした。しかし、読み進めていくうちに、その「色」の中に、たくさんの感情だったり、その背景だったり、この本に込められていることに気づきました。

この本は、イギリスに住む日本人の母親が、自分の息子の学校生活を記録した本当の話です。息子は、日本人の母とイギリス人の父を持ち、日々暮らしています。タイトルとなっている「イエロー」はアジア系の人の肌の色、「ホワイト」は父親の肌の色、「ちょっとブルー」は英国の制服の色、また、モヤモヤした気持ちや不安を表しています。

僕が通っている「元・底辺中学校」と呼ばれるイギリスの公立校では、さまざまな人種や文化、経済背景を持つ生徒たちが通っています。この学校の最大の特徴は「多様性」です。生徒の中には、移民の家庭の子、貧しい子、裕福な家庭の子、ジェンダーに悩む子など、本当にいろいろな人たちがいます。そこで息子が直面するのは、差別、

ことだと思えます。私自身も、今までに「見て見ぬふり」をしてしまったことがあったかもしれない、と深く反省しました。

この本では、多様性はとても大切だけれど、実際にはぶつかり合いもあるし、理解するのが難しいという現実も描かれています。それでも、「分かってもらうこと」「話し合おうとする」とは、必ず意味がある、という希望も感じられました。

後半で、息子が「今の自分はイエローでホワイトでちょっとグリーンだ」と言う場面があります。グリーンは「自分の未熟さ」を表していますが、それと同時に「成長中」という前向きな意味が込められているそうです。

多様な人々と出会い、ぶつかり、悩みながら、彼は少しずつ、強く、やさしく、広い視野を持つ人間に成長していきます。その過程が、この本の一番の魅力だと感じました。

私たちも、学校や家庭の中で、日々「違い」に出会っています。そのとき、つい避けたくなったり、怖くなったりすることもあります。でも、「違い」を知り、向き合うことは、実は自分自身を知ることにもつながります。そして、自分の世界を広げてくれる大きなきっかけにもなります。

この本を読んで、私は「違いを知ることには、弱さではな

偏見、いじめ、そして時には自分自身の存在の揺らぎでした。

印象的だったのは、母親と息子がいつも対話を通して、社会の問題や、自分たちの感じたことを一緒に考えていることです。息子が学校で体験して思ったことを家で母に話し、それについて2人で意見を交わす姿は、まるで、友人のようでありながら、深い信頼と愛情が感じられました。

その中でも私が特に心に残ったのは、「共感」という言葉です。母親が何度も息子に伝えるのは、「相手の靴を履いてみる」という考え方。つまり、他人の立場になって考えることの大切さです。違う文化、違う言葉、違う肌の色、違う価値観。そういった「違い」に出会ったとき、それを否定するのではなく、「その人はどんな思いでいるのだろう。」と想像してみること。それが共感であり、多様性を理解する第一歩なのだと思えました。

また、「沈黙は同意だ」というメッセージにも強く心を動かされました。差別やいじめを見たとき、何も言わずに見ているだけでは、自分もその行為を認めたことになってしまう。勇気を持って「それは違うと思う」と言えること。それが、どれほど大切な行動なのか。これは学校生活でも、SNSでも、家庭の中でも、どこでも言える

く強さなのだ」と気づきました。これからの社会で求められるのは、知識だけではなく、共感する力、話し合う力、違いを受け入れる心です。だからこそ、私も「ぼく」のように、対話を恐れず、勇気を持って自分の意見を伝え、誰かの気持ちに寄り添える人になりたいと思います。

「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」

著 ブレイディみかこ
新潮社



講評

審査委員長 池上 英明
(大阪教育大学)

今年度実施した「第44回人権啓発詩・読書感想文」には、大阪府内から959点の応募がありました。内訳は詩部門799点、読書感想文部門160点です。

多くの皆さんが応募して下さいましたことに感謝するとともに、30人の方の入選をお祝い申し上げます。

審査では詩と読書感想文の部門ごとに、小学校(小学部)低学年、高学年、中学校(中学部)に分けて、審査委員の間で意見交換し、子どもたち一人ひとりの心情や背景に想いを馳せながら、審査を進めました。

以下一部ではありますが、審査委員から出た意見を紹介したいと思います。

〈詩部門 小学校(小学部)低学年の部〉

SNSでみんなの意見に流されることも多い中で、「何でも人と比べずに、自分で決めることが一番だいじ」と言い切れることについて考えさせられた。

〈詩部門 小学校(小学部)高学年の部〉

ある程度周りの状況が見えてくる時期かと思うが、身近な存在の人との関係を通して、人権尊重の大切さ、気づきの視点が入った作品になっている。この作品を読んだ人の気づきにもつながると感じた。

〈詩部門 中学校(中学部)の部〉

普段、他の人との関わりにおいて「普通」という枠を超えないように意識している時期で、自分自身について、見つめ直した作品なのだろうと感じた。「普通が良さを隠してしまう」というフレーズが、この作品を読んだ同年代の子どもたちも自分について考えるステキな問いかけになるかと思った。

〈読書感想文部門 中学校(中学部)の部〉

この作品の題材となっている本について、感想を言語化できており、うまくまとめていると感心させられた。人権問題を真摯にとらえてどうするべきか、自分なりの考えを持っていることが伝わってきた。

子どもたちが作品に込めた思いやその背景を考えると、正直なところ、審査することが非常に難しかったというのが審査委員一人ひとりの気持ちです。入選とならなかった作品の中にも良い作品がありましたし、更には、ここに掲載されない多くの子どもたちの思いや考えがあることも私たちは、忘れてはならないとも感じました。

最後になりますが教職員はじめ保護者の方々には、これまでのご指導、ご支援くださり本当にありがとうございます。この作品集が大阪府内の各学校等において活用され、子どもたちの人権感覚の醸成に寄与出来ることを願ってやみません。

今回の入選者のみなさん



令和8(2026)年1月25日(日) ピースおおさか(大阪国際平和センター)



大阪府広報担当副知事 もずやん

令和8(2026)年2月発行

主催 大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会(愛ネット大阪)